

# Faculty Development INVITATION

山梨大学教育学部  
第35号  
March.31.2018

## 2017年度教育学部FDフォーラム報告



2017年度教育学部FDフォーラムが2018年1月24日(水)13時30分から15時まで、甲府西キャンパスJ号館5階A会議室にて行われました。

FD (Faculty Development) とは、教育や研究などの環境をよりよくしていくための大学や学部の取り組みを言いますが、本フォーラムは学部や大学院の学生、院生の代表に出席いただき、学部長、関係教員との懇談を通して、大学における課題と今後について考える貴重な機会として、毎年開催されています。

今回のFDフォーラムのテーマは「教職・研究支援の現状と今後の在り方」でした。最初に中村和彦学部長からテーマに関わって、以下の大きく2点について説明がなされ、学生の忌憚のない意見を求めるとの発言がありました。

1. 教員養成に特化した学部としての教員就職率の向上のための対策について
2. 平成31年度からの修士課程の教職大学院一本化について

1.については、水曜午後に設定している教員採用試験対策講座を積極的に利用願いたいとのメッセージが添えられました。

その後、出席者の自己紹介があり、引き続きフォーラムのテーマに沿い、以下の4点について学生、院生と教職員による意見交換がなされました。

- A. 1年次に履修する科目(共通教育科目)について
- B. 介護実習や観察実習について
- C. 教育実習について
- D. 就職・研究支援について

学生、院生の主な意見を要約すると、A.については、教員をめざす意欲が増す専門の授業の希望、B. 介護実習については、必要とされる健康診断の内容や実習時期等の見直しの要望、B. 観察実習とC. 教育実習については、実習指導のあり方や実習に向けた大学での授業内容等についての要望、D.については、教員採用試験対策講座についての意見となります。

全体を振り返って、学部、大学院の教育の在り方を考え、改善する上で、我々教職員が共有すべき多くの貴重な意見が得られたと感じました。このような機会を持つことの意義を再認識しましたが、一方、学生自治会が活発に活動していた時代に学生生活を送った者としては、教職員サイドで設ける会以外に、学生たち自身で意見をまとめ、フォーラム開催を企画するなど自主的な活動があってほしいと思いました。今回の学生・院生の出席者は、学校教育課程と生涯学習課程の各コース、特別支援教育特別専攻科、教育学研究科修士課程と教職大学院の代表者計12名で、時間の関係で限られた人数でしたが、出席しなかった学生はぜひ出席者からの報告を共有してほしいと思います。

最後に、参加いただきました学生代表及び関係教職員に感謝いたします。

FD委員会 時友裕紀子

# 附属学校での研修報告書

## 附属幼稚園 教育支援科学講座 渡邊 茉奈美

私は乳幼児期の親子関係に関心があるため、附属幼稚園の観察に行った。その中でも特に親子の分離場面で子どもの不安が高まるとされる登園時の様子に着目した。年中クラスの登園の様子を観察したが、その間に登園した子どもたちは、驚くほどスムーズに保護者から離れ、保育者やすでに教室にいる友人の元へ移行していた。これはその後観察をした年少クラスでも同様だった。登園時の分離とは子どもにとって一大事であり、場合によっては大泣きする子どもがいてもおかしくない。しかし、このようにスムーズにできる子どもばかりであることは大変興味深かった。この背景として、親子関係が良好であると同時に、保育者の日常的な関わりも、子どもたちにとって安定したものであ

るからなのだろう。

また、登園後に私が注目していた子どもは、登園時からずっと外遊びをしたい様子で、外で遊ぶ子どもたちを見つめていたが、なかなか主張のできない子だった。ひとりで外に出たり、中で帽子をかぶって外に行くことを周囲にアピールしたりするが、なかなか誰も外に出てくれなかった。しかししばらくして保育者が来ると、これまでできなかった“外で遊びたい”という主張を明確に伝えることができた。このエピソードからも、子どもたちにとって、保育者が心地よい存在であることがわかった。

以上より、附属幼稚園における保育者と子どもたちとの関係性の良好さがうかがわれた。

## 附属中学校 教育実践創成講座 猪股 真弥

新任教員の初任者研修ということで、11月13日(月)に、附属中学校を1日見学させていただきました。私は昨年度まで、公立中学校に勤務していましたので、同じ校種の附属中学校を1日見学させていただくこととしました。当日は、1校時から6校時まで、ほぼ全てのクラス・教科を見せてもらいました。

教室は、掲示物がきれいに貼られ、教室環境への配慮を感じることができました。数学では、じっくり考



える場面と時間を確保し、生徒たちはまず1人で考え、その後はグループで意見を出し合い、最終的に1つの結論に到達するという、理想的な授業が展開さ

れていました。また、合唱コンクールの後ということで、録画した映像を見せてもらい、私の中にある附属中伝統の合唱が今もなお、息づいているんだということを感じることができました。どの学年もそうですが、特に中学1年生でありながら、しっかり先生の話を集中して聞くことができる姿には、感動すら覚えました。また、特に印象に残ったことは、先生方が常に笑顔で、しかも温和な態度で生徒に接しており、生徒の活動を包括的に見守られているような雰囲気の中で、生徒たちはのびのびと生活しているのだろうと思うことができました。こうした生徒を育てることができる教員の魅力を改めて感じる事ができ、山梨大学教育学部の存在理由を考えることができました。

最後に、このような貴重な機会を与えてくださった校長の藤原先生、当日面倒を見てくださった五味副校長先生をはじめ、附属中学校の先生方、また、企画してくださった木島委員長をはじめFD委員会の先生方に心より感謝申し上げます。

## 附属中学校 社会文化教育講座 鈴木 健之

11月9日(木)、附属中学校で新任者研修が行われた。研修といえば、講師の話を聞いたり、ロールプレイをしたりというのが一般的なイメージなので、当日もそのような内容になると思っていた。しかし、内容は全く違って、1時間目から6時間目まで、中学校の授業を見学するというものであった。副校長によれば、どの授業を見てもよいとのこと。どれにしようか迷ったが、社会科の所属なので、社会の授業をしっかりと見ることにし、1時間目：地理(1-3)、2時

間目：公民(3-4)、3時間目：公民(3-1)、4時間目：地理(1-4)、5時間目：地理(2-3)、6時間目：道徳(3-4)を見学した。

どの先生も生徒一人一人の名前を憶えていて、目配り、気配り、心配りしていた。授業の構成・展開もよく考えられ、よく練られたものであり、とても参考になった。内容によってグループワークを取り入れたり取り入れなかったり、クラスに応じて同じ内容でも教え方を柔軟に変えたりなど、私自身の教育実践におい

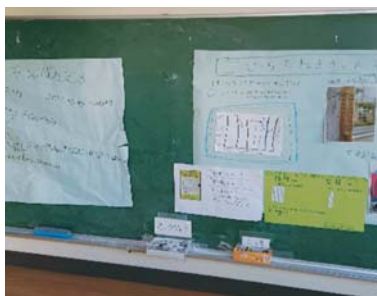
て参考になることが多かった。パワーポイントも効果的に使用されていた。ただパワーポイントを映すモニター（テレビ）が古く、後ろの方からだと見づらかった。またグループワークで使用するホワイトボードが小さく、これも後ろの方からは見づらかった。附属中学校の教師が素晴らしい教育のプロであることはこの目で確かめることができた。ただPCやAV機器は貧

弱である。こうした教育機器の充実が望まれることを痛感した。



### 附属幼稚園 社会文化教育講座 川島 亜紀子

この日から、学部2年生の観察実習が開始され、学生たちは、初日ということもあり、緊張した様子で子どもたちの様子を一生懸命観察、記録していた。園の環境構成は子ども中心で、子どもの発達をよく考慮したものとなっていた。驚いたのは、釘や金づちが子どもの手に届くところにあったことで、これまでの園では、見かけたことのないものであった。危ないから、と隠すのではなく、むしろ、自ら学ぶ機会として用意されているのだろうと思い、大変興味深かった。



植物の栽培についてのポスター

登園時、保護者対応や児の受け渡しがあり、教員の目が行き届かない

ときがあり、園児間でトラブルが発生し、叩きあう、掴みあう、押し合う、といった状況が生じた。観察実習の学生も数名その場において見ていたが、実習生は、観察実習のルールを守り、子どもたちに介入したり、あるいは、教員に助けを求めたりといったことはなかった。結局、別の子が教員を呼びに行き、教員の介入で、もめごとはすぐに収拾した。このような園児間のトラブルに、観察実習であったとしても介入するべきか否か、どのくらいのトラブルならば介入すべきか、架空のケース等で考えさせるような授業は、子どもの対人葛藤をどう扱うか、という意味で学修を深めることにつながるかもしれない。

最後に、園長先生と副園長先生から、現在幼稚園が抱える問題についてお話を伺った。園では丁寧な観察をもとに、子どもの日々の気持ちの揺らぎに注意が向けられており、細やかな配慮がなされていることが理解できた。

### 附属中学校 科学文化教育講座 林 丈晴

平成29年11月9日（木）、附属中学校における新任研修に参加させていただきました。

私は、高校の教員として9年間教壇に立たせていただきましたが、教育学部の付属学校に長時間お邪魔させていただくのは、大学生の時の教育実習以来で、随分昔のことになります。今回の研修では、自分が今まで教員として携わってきた学校と教育学部の附属中学校を比較しつつ、どのような連携ができるかといった視点で、私の直接関連する教科である「技術」をはじめ様々な授業を見させていただき大変勉強になりました。

さて、話は変わりますが、研修に参加させていただいた日は、合唱コンクールの前日で学校全体が緊張感に包まれておりました。生徒たちは真剣にその練習に取り組んでおりました。その真剣さ、クラスのチームワークの高さに驚きと感動がありました。しかし、「最初はバラバラで、意見のぶつかり合いやもめるなど、

決して順調にここまで来たわけではありません。」という声を耳にし、ハッといたしました。今後、私は教育学部の大学教員として教育・研究を行っていきますが、その中で、“どんなによく見えることでも、その裏には現場の困難と努力がある。”ということをお忘れではないと思いました。そのためにも、常日ごろから現場にお邪魔させていただくことの重要性を痛感いたしました。

最後にこのような機会を与えていただきました附属中学校の先生方およびFD委員会の先生方に心より感謝申し上げます。



## 附属幼稚園 身体文化教育講座 金沢 翔一

7月7日に初任者研修として附属幼稚園を見学させていただきました。近頃、「子供の仕事は遊ぶこと」という言葉をあまり耳にしなくなりました。それと変わるように英才教育を施す幼稚園も増えてきています。研修前は、「大学の附属幼稚園だから勉強しているのであろう」と思っていたのですが、その考えは良い意味で裏切られました。登園の時間になると園児たちは、自宅の近くで見つけた昆虫を私に一つずつ説明してくれたり、ウサギやザリガニに餌をあげたりしていました。研修に行った日は附属小学校へ水遊びに行くというので様子を見学しました。短い時間の中で水に触れる機会を設けて、たくさん遊んでいました。また私が水泳をしていたということもあり、4種目泳ぐとみな大きな拍手をしてくれました。園に帰ると、夏祭りのごっこ遊びをしていました。そこでは、園児が作成した出店で様々な催し物を行っていました。めんこ屋さんでは、園児の作成しためんこで勝負をしたり、フラ

ープを使ったダンスを見たりしました。遊びの中で、基本的な動きの定着や動植物に触れることで興味関心が高まってくのだと感じました。

今回の研修を通じて非常に多くの学びと発見をすることができました。このような機会を与えて頂いた附属幼稚園の先生方、FD委員会の皆様にご心より感謝申し上げます。



## 〔FD研修報告〕

### 次世代型教育推進総括セミナーに参加して

FD委員会副委員長 服部 一秀



2018年2月14日(水)、独立行政法人教職員支援機構の次世代型教育推進センターによる次世代型教育推進総括セミナーに参加しました。次世代型教育推進センターでは2015年より、「新たな学びの指導方法等について、関係機関等の協力を得ながら、各都道府県における中核的指導者となる教員を育成するとともに、教員の指導力向上のための研修プログラムモデルを構築すること」を目指し、「新たな学びに関する教員の資質能力向上のためのプロジェクト」を展開してきたとのことです。その成果を公表し、全国の学校現場における指導方法等の改善に資する

ため、今回の次世代型教育推進総括セミナーが開催されました。実践フィールド校における取り組みの紹介、次世代型教育推進センター研修協力員の総括発表「実践を通してアクティブ・ラーニングを考える」、石井英真氏(京都大学)の講演「主体的・対話的で深い学びの実現のために」が行われました。

このセミナーに参加し、小学校・中学校・高等学校における取り組みに触れ、大学の授業改善に向けて学べることは多いと感じました。「ひとりの授業改善からみんなの授業改善へ」と学校全体で授業改善をすすめるために校内研を重視すること、日々の授業と校内研を授業改善に向けた課題の発見・解決のための「学びのサイクル」に位置づけること、「主体的・対話的で深い学び」を日々の授業においてと同様に校内研においても重んじること、校内研では提案授業に基づく全体協議だけでなく、狙いによって様々な方法や形態が可能であること、「教科の枠を越える研究協議」を通して自教科の授業の有り様を相対化し改善の手がかりをさぐることができるようにすること等々です。勿論、これらを参考にすることも、大学版校内研を実効的にすすめていくためには様々な条件整備が必要でしょう。その意味で、教職大学院の拡充改組は一つのチャンスといえそうです。教職大学院の教育に教育学域の多くの先生方が関与していくことは、授業改善の文化を本学域において一層育んでいくことにつながるのではないのでしょうか。

今回の参加は、本学域におけるFDの今後について改めて考えをめぐらす有意義な機会となりました。

## 1年のFD活動を振り返って

FD委員長 木島 章文

昨年2月あたりに学習指導要領改訂の研修を受けました。児童生徒の積極的な取り組みを引き出せ、カリキュラム策定に積極的に取り組み、教育内容を通教科的にデザインしろといった方針が羅列されていました。児童・生徒も教員も、関わる全ての人々が積極的に取り組むためには、それなりに興味を引く教育内容が必要だと思いました。教員はともかく本来は児童生徒に専門性はないわけですから、そうした教育内容が通教科的であるべきなのは当然かなと思いました。私は日頃、共通教育科目の体育(生活と健康)を教えています。教えているというより、受講生を応援して授業の環境

を管理しているだけなのかもしれません。様々なスポーツに熱心に取り組む医学部・工学部・生命環境学部生(不思議と教育学部だけ、一度も受け持ったことがありません)を見てみると、真摯に遊ぶ学ぶ姿に熱い知性を感じずにいられません。その一方で学校教育のみを目的とする学習内容に知性を研ぎ究める要素があるのかと、FD活動と日頃の仕事を通して問題意識をもつようになりました。研究機関としての体裁が崩れつつあるなか、あくまで楽しくかつ歯を食いしばって遊ぶ学ぶ環境作りに貢献したいと思います。